【巻　頭　言】

古田秋太郎先生との交流

中京大学理事長，名誉教授　小　川　英　次

筆者が中京大学へ赴任したのは 1994 年（平成 6 年）春でした。古田先生はその時，すでに先任の教員でした。経営学部の新設時には大いに貢献されたお一人だと聞いています。私が先生と出会ってからすでに 18 年になろうとしています。この間，先生には経営学部長，エクステンションセンター長を歴任，2007 年 4 月から 2 年間，新設の独立大学院ビジネス・イノベーション研究科の科長に就任，特に中小企業診断士コース開設に取り組まれました。ご苦労様でした。

筆者の赴任当時，先生は新進気鋭の教授として颯爽としておられたのが印象的でした。学校での特に密接な交流は，先生がビジネス・イノベーションの研究科長をしておられる時でした。当時，筆者は中京大学を退職し，学園の学術顧問として学校に残っていました。ビジネス・イノベーション研究科の教授会には，オブザーバーとして出席を許されていた私に，先生は几帳面に月一回は研究科委員会の開催される前に，何が研究科で起こっているか話しに来て下さいました。情報不足になりがちな当時の私には，嬉しいことでした。先生の優しい配慮の利いた一面だと思います。早いものでその古田先生が，いまや退職の時期を迎えられましたこと，時の流れの速さを感じています。

古田先生の生い立ちはどこか私と似ているところがあるようにかねてから思っていました。この機会に改めて先生にお聞きしますと，古田先生と私は中小企業主の息子であることがわかりました。そして共に事業の後継者の道より，教員の道を選んだのでした。しかし，教育，研究の重点は事実の確認に基づく立場に取り続ける点は共通でした。

先生の業績は多数で，いただいた業績のリストを拝見しますと，実証的研究の多いことに気が付きます。若い頃，理論的研究の研究指導を受けられ，自らの独自の研究を展開する時期となるや，問題解決的アプローチによって生きた経営学を，研究と教育において貫かれました。中京大学時代に著書 9 冊（単著 4 冊，共著 5 冊），45 篇の論文を学内機関誌に，精力的に発表されました。特に，2000 年以後は，中国における日本企業の実証研究に努力を集中しておられます。

先生の近著『日系企業の中国市場販売』（税務経理協会，2007 年）を拝見しますと，中国にある日系企業の課題は市場展開にあり，国内製造，国内販売を中国で意図するなら，後者の国内販売こそ大切であり，古田先生はアンケート，インタビューを通して経営の現地化（経営者の現地人化）しか解決の道を見出すことは難しいとされています。いまさらのように，現実の国際経営は難しいものだと痛感します。筆者も 1990 年代中国への技術移転の問題を研究しました。それもあって，国際経営問題解決に市場開発の重要性が理解できると同時に，この分野の問題解決の複雑性，統合的判断の必要なことが理解できます。

古田先生は，先程引用しました近著の「はしがき」部分において重要な提言をしておられます。経営学という学問は，事実に立脚して展開すべきであるとされ，次の 7 つの項目を指摘されています。

⑴　事実の中から真実を把握する。
⑵　現象に対して本質を把握する。
⑶　諸関連の総体において把握する。
⑷　重要な要因を副次的要因から峻別して把握する。
⑸　すべてを変化の過程で把握する。
⑹　矛盾する両側面を把握する。
⑺　量の質への転化を把握する。

(より詳しくは，古田先生の論文「正しい認識はいかにあるべきか？」中京大学大学院 中京大学ビジネス・レビュー，第4号，2008年3月，10〜14頁参照)

まさに卓見というべき指摘であります。教育と研究に真摯に取り組まれた先生にも趣味があります。先生に直接聞いてみますと山登りと音楽鑑賞とのことです。一生のうち日本アルプスへもう一度登りたいという夢をお持ちであり，音楽の方は若い頃からの趣味です。お会いするたびに音楽談義となりました。先生は室内楽を好まれ，特に弦楽四重奏曲がお好きの様子です。これを聞いて私もそちらの方向へはまりつつあります。

先生。18年もの間，交流有り難うございました。

ご退職後も，折あれば研究・教育そして音楽についての談義・互いに元気なうち続けたいと思います。

先生ごきげんよう。